1968　昭和４３年１０月１５日　№480　鶴研
雑誌　キネマ旬報　１０月下旬号　４頁
㈱キネマ旬報社

われら映画を愛する者の真情

対談　内田吐夢・鶴田浩二

「飛車角と吉良常」撮影で初顔あわせの二人が一夕しみじみと語る
日本映画界の現状への、映画を愛するものとしての真情あふれる直言

三十二年目の人生劇場

内田　今日の小田原ロケは、晴天に恵まれて、よかったね。大へん、いい絵が、撮れましたよ。クランク・イン七日目、脂がのってきたところだ。ま、一杯。

鶴田　いや、今日はね、僕はアルコールっ気抜きでお話したいんです。内田さん、前に、「人生劇場」をお撮りになったのは、いつのことになりますか。

内田　昭和十一年に日活でやったわけだから、そう、三十二年前です。尾崎士郎さんも僕も青年でね。よく二人でいっしょに飲みましたよ。今度の「飛車角と吉良常」もね、実は尾崎家からの僕に対する期待もあって、実現した企画なんです。僕はね、尾崎さんのお墓参りを、実はまだ、してないんだ。だから、今度の作品をこしらえて、それを手向けて、お墓参りをしたいんです。良いものを作らなけりゃ、尾崎さんのお墓に参れませんよ。僕自身が「人生劇場」に出てくる日本の一つの時代というものを、よく知ってもいるしね。

鶴田　僕は、今度の作品で自分に課されたのは、そういう内田さんの構想された「人生劇場」の大きな人間絵図の中の一人、飛車角という人物を、いかに把握し、演技するか、ということだと思っています。映画は今、正直いって不振ですよ。粗雑な仕事が多くなっている。日にちをきられ、予算をきられ、時間を封切に合せて、耐えられる限界まで、ギリギリの仕事をしてる。そういう時に、東映で他ならぬ「人生劇場」をやる意味、これはね、貴重な報告書になると思っているんです。

内田　そう。気負うわけじゃないが、この作品だって製作日数三十日間、決して条件は良くはない。でもね、それをはねのけるエネルギー。それが、僕らの支えだね。「吐夢がヤクザ映画をやるのか」なんて声も、あった。でも、そんな気持じゃ、絶対ないね。

鶴田　今はね、映画会社が映画を作らずに、化け物、見世物を作っている時代だ、と僕は思うんです。その中で、今度の仕事は、極めて素直に、映画作りのスタート・ラインにたちもどれる仕事だ、という気がするんです。これをチャンスに、僕はもう一ぺん反省してみたいと思っています。役者としての自分を、見つめなおし、確かめなおすことを、やってみたい。

ここに映画人あり！と

内田　一つの制約の中に自分をおいて、とにかく全力投球してみたいね。自分の肉体と能力の限界を、めいっぱいに、試してみたい。でもね、そんな時に恐ろしいのは昔自分が一年に八本も映画を作ったことがあるという、その経験ですよ。今は、のろくなったけれど、何か当時の自分に対する過信が、どこかにある。年をとっても、やればやれる、という思いね。これが、自分で、こわい。そこでね、僕はこの映画を作ってる間、撮影所に泊りこむことにしたんです。そうすることで、考える時間をせいいっぱい作る。何かが起っても、いつでも現場の近くにいるわけだから、解決がつく。これを、制約に対する一つの解決策にしようと思っているんだ。

鶴田　僕はね、内田さん、映画が好きで、映画のとりこになった人間です。他にくらべるもののない、映画の良さ、その素晴らしさにとことん打ちこんで映画界に入った人間ですよ。そりゃね、映画も一つの企業ですし営利事業なんですから、利益を追求するのは、当り前でしょう。でもね、映画会社が、フィルムにただ絵を印刷するだけの会社になってしまってはいけないと思う。割切れませんね。自分を映画にとりつかせた、あの往年の名作がもっていた、忘れられない素晴らしさ。それが映画から失われてしまっていくのは、情とした忍びない思いがします。本当に映画はこれでいいのか、と思いますよ。サイレント、トーキー、カラー、ステレオ化と、進歩してきているはずの映画が、いったいこれでいいんだろうか、とつくづく思いますよ。

内田　鶴田君とはじめて顔を合せた時ね、僕は「ここに一個の俳優ありき」と思った。そこでね、僕もそれに対して、「ここに一個の監督ありき」というものを出して答えなければならん、と思った。僕はね、鶴田君、芸術というものを、基本的に信頼しているんだ。人間が作る芸術というものは、永遠に滅びはしませんよ。それを僕は、信じている。現状には大いに反発するけれど。

鶴田　これは、映画会社だけの責任じゃ、ありませんけれどもね。一種の植民地政策をとらされている日本の、文化の方向それ自体が、原因でもありましょうね。きちんとした情理の上にたった映画が、世にうけ入れられず、商売として成立しない。ただその場、その場の刺激だけが求められている。そういう唯物的な考え方ばかりが、はびこっています。だから資本家側にいわせれば「お客がくるからこういう映画を作るんだ」というでしょう。そうなると、ではいったい「なぜくるのか」ということを、考えなければいけませんよね。

内田　本当にそうです。

男の歌を歌いたい！

鶴田　映画界が、前向きの作品を送り出した時期もあるんですが、興行的失敗で打ち切らざるを得なかった。そうなると映画人を含めた一般大衆の問題になってきますね。それに対する態度として、いちばん簡単なのは、そこから逃避することでしょうね。映画にあいそをつかして、逃げ出すことでしょう。でも、逃げられない人間というのがいる。僕はその方なんです。なげき悲しんでばかりは、いられませんよ。オートメ化した映画産業のありかたが、総てを、ことに役者をいいかげんにしている気がする。今度の「人生劇場」は、それを出発点に引きもどす、いいチャンスですよ。どう望んでもめったにこない、チャンスですよ。僕にとっては。これに、しっかり食いついてみたいんです。「吐夢がヤクザ映画をやるのか」なんていった人がいるそうですが、これは決してヤクザ映画じゃありませんよ。世の要請もあって、僕は東映で、ヤクザをヤクザとして、アウトローをアウトローとし、演じてきましたよ。でもそれだけじゃいけないんだと思う。そこから、何をどう伝えるかが大事なわけでしょう。ヤクザの世界をヤクザの世界として、そのまま伝えたのでは、何にもなりはしませんよ。それが一つの人間のドラマにつながる、男の歌を、僕は歌いたいですよ。

内田　鶴田君、映画企業が、こんなことをつづけていたら、僕は映画そのもの、それ自体が自分の血路を切りひらいて、今とは別の道を歩んでいってしまうような気がしてならないんだ。現代の映画人は、順応の中に抵抗の精神をもつことだ、という気がするね。そうなんだ。現状から、逃げてしまうのが、実は、いちばんいけない。

鶴田　逃げられる人は幸せですよ。僕は映画界が悪かろうと良かろうと、逃げ出すわけにはいかないと思っている。自分の人生の三分の二を費してきた映画界ですからね。もう逃げられません。逃げられると思わないし、また逃げよう、という意志もありませ

ん。戦うだけです。そのかわり幼稚園のケンカはしたくない。根強い抵抗を、していきたいですね。

内田　その順応と抵抗の中に一つの変化が出てくる。その変化を、どう進行させていくかが重要ですよ。具体的な仕事を通じて、それを押しすすめていくことがね。

映画の泣き声が聞える

鶴田　だから僕は、逃避はしません。僕は映画にどっぷりと、惚れて、つかってしまった人間なんだから。でもね、こんなことをいうと、口はばったいといわれてしまうかもしれないですけれども。時々、映画のことを外側から文字で書いてくださっているかたがたにも、申しあげたい気持がしてくることがあるんです。日本映画を誹謗なさるのもいい。でも、それならいったいどうすればいいのかも、文章を通じて考えていただきたい。打開策をアドバイスしていただきたい、ということです。直接利害関係のない立場からは、それがいちばん、はっきりいえるはずなんですから。ただ、誹謗するだけなら、誰にでもできます。さればどうすればいいか、を、僕たちといっしょに、苦しんでいただきたい。そう思うんです。

内田　確かにそうです。僕もそう思う。

鶴田　逃げられない泥沼の中に背中までつかって、もうすぐ口や鼻まで窒息させられてしまいそうな状態で、どうふみとどまり、もがいたら脱出できるのか。僕自身をふくめて、その方法を、いっしょに考えていただきたい思いが、しきりなんです。そこから抜け出すために、たとえば三船敏郎さんと石原裕次郎さんが「黒部の太陽」で、一つの成果をおさめられた。つづいて中村錦之助さんが「祇園祭」をやっておられる。大へん立派ないいことだ、と思いますね。みんなの努力で、何とか成功させたいと思います。これは、意味のあることですよ。

内田　たしかに映画は今、時流のままに押し流されている。が、映画自身がもう「こんなことはもうイヤだ、もっといいものにしてください」といっている、という気が僕はするな。こんなことをつづけていたら、映画の方が自分から、今の映画企業よりも、もっと大きな資本の方に、いってしまうかもしれない。そんな気がしますよ。すでにそういう徴候が、いくらか現われてきているんじゃありませんか。映画自身が「今までのような作られ方ではもういやだ」と、泣いている声が、聞えますよ。映画人は今、初心を忘れちゃいけない時なんだ。鶴田君はその初心を、だいじにしている人だな。

鶴田　厳しいお人がらの内田さんが、現在の映画界に妥協するのではなく、すすんで今の映画界に飛びこんで、一つ前進しようとして「飛車角と吉良常」を撮ってくださる。三十日間の条件の中で、やってくださる。これが僕は、うれしい。勇気がいることですよ。それが芸術家の「若さ」というものでしょうね。とても、若々しいということですよ。

内田　いや、そこまでいわれては面目ない。実は僕は、ゼイタクだから、三年間映画を作らなかった。だが鶴田君は、その間ずっと、バッター・ボックスにたってきた。そういう素朴な強さ、それが、あなたにはあるんだ。それと組んで、僕は今、不思議なエネルギーが出てきている。もう僕自身、映画を撮らねばならない限界でしたね。ギリギリの。

鶴田　さっきもいったように、尾崎文学を抜萃して構成される、内田さんの「人生劇場」の、僕は飛車角という、その中の、一人の登場人物にしかすぎないわけですよ。だから、かつて自分が作った飛車角のイメージをいかに早くすてて、内田さんの飛車角になり切るかが、勝負だと思っています。よこしまなことは何一つ考える必要はないん

です。今日唯今、改めて役者になったつもりで、内田演出「人生劇場」の人物の一人になろう、と思います。この二、三日でそれがすてきれて、内田さんが何をやろうとしておられるか、どうやら理解できてきたつもりなんです。だから「『人生劇場』より・飛車角と吉良常」となっている今度の映画の題名は、実はちょっと、ちがうんだな。（笑）

内田　鶴田君の飛車角のイメージを、すてられちゃ、困る。（笑）それを持続させてもらって、生かしてもらわなければ。それにね、題名なんぞ、どうでもいいさ。（笑）中味が勝負ですよ。衣裳や考証がどう、といったことではなくて、僕は「人生劇場」の時代の日本人の心というものを、知っている。それを今、映画にしておかなければ、という責任感を、感じているんです。第一回映画化の時も都新聞連載中から、この企画を僕は会社に、自分で出したんですからね。

いい映画にしたい！

鶴田　好きでなった映画俳優生活が、僕はもう二十年ですよ。年齢的にも僕は、もう、決して若くはない。困難よりも楽をとりがちな今の映画界で、芝居というものをもう一ぺん見つめ直して、苦しめるチャンスを与えられたこの好機を、力いっぱい試してみたい。キザに聞えるかもしれませんが、自分で本気で、しんそこそう思っているんです。これ以上やったらきまりがわるい、なんてテレずに、めいっぱいやってみます。役者のあり方としては、どんなに巧いいいかげんさよりも、下手くそでも一生懸命の方が、本当だと思いますからね。もちろん、今までの自分がいいかげんにやっていたなんてことじゃ、毛頭ありませんけれども。

内田　僕も、もう引くに引けませんよ。旅順口がおちなくても、乃木さんは帰るわけにはいかない。何が何としても、二〇三高地をおとさねばならない。どうも、このたとえは、あまりいいたとえじゃないかな。（笑）でも、そんな気持なんだ。制約の中に、力いっぱいぶつかっていきたい。

鶴田　内田さんのように若い、映画青年の心をもった人が映画界には、へってきましたね。他にくらべるもののない、よさをもった、活動屋根性をもった人。そういう人たちが、かっ歩できたのが、映画界であったのに。われわれの、今までのわがままも反省しなくてはなりませんが、やはり映画会社は見世物を作ってほしくないですよ。映画を作ってもらいたい。本当に映画の好きな人たちが、得心のゆく作品を作れる世界でありたいですよ。

内田　会社は「飛車角と吉良常」を、大成功させようと思っているけれど、あるいは、そうは注文どおりには、いかないかもしれませんよ。（笑）でも、仕事を通じて、現状への具体的発言をやってみたいと思う。僕なりの「人生劇場・残侠篇」の中に僕の主張をこめてみますよ。

鶴田　セットに入っていても内田さんの狙いというものが、痛いほどピリッと、われわれに伝わってきますね。そんな感じですよ。

内田　仕事をよく解っている俳優さんに出てもらうということは、監督にとっては、とても楽だね。それだけ、他のところに目がとどくし、場面の背景というもの、雰囲気というものを出すための工夫に、力をそそげる。やはり、映画は場面全体の情景のとりかた、ということが大事ですから。

鶴田　辰巳柳太郎さんも、がんばっておられるし、藤純子君もファイトをもってやっています。みんなピリッとしていますよ。

内田　いい映画にしたいですね。そういう、われわれの力を結集してね。とにかく、しっかりやろう。